十二社石塚

序

智識道德ハ言語ノ氣骨文學ノ神髓ナリ支那古今ノ文學ヲ歷覽シテ其盛衰ノ理ヲ究メ本邦文學ト稱スルモノヽ沿革ヲ考ヘテ其ノ消長ノ本ヲ推ストキハ容易ニ此ノ言ノ正當ナルヲ知ラン近ク我國ニ現ハレタル事實ヲ以テ之レヲ例証センニ往昔支那文學ノ渡來シテ國ニ行ハレントスルヤ之ヲ便ナラズト思フノ感覺ハ當時猶ホ羅馬字ノ行ハレントスル今日ニ異ナラズ之レカ爲ニ純乎タル漢文ハ漸ヤク一變シテ奇異ノ和漢文（古事記日本記三代實錄ノ如キ其例ナリ）トナリ更ニ進化（眞正ノ進化ナリ）シテ平假名文トナリタリ是レ日本ノ人心支那文學ニ叛キテ已レニ便利ナル新法ノ設立ヲ企テタル者ニ非スヤ然レトモ其成績見ルニ足ルヘキモノ無ク荏苒歲月ヲ經過シテ今日ニ至リ氣骨神髓共ニ强勁ナル西國文學ノ刺衝スルニ依リ此ニ始

メテ支那文字廢棄ノ運ニ向ヘリト云ハサルヲ得ズ其然ル所以ノ者ハ蓋シ當時ノ和文ハ數箇ノ原因アリシカ爲メ堂々タル道德ノ精神ニ乏シク浮華艶麗淺弱ヲ尊ヒテ自ラ女文字ト稱セラルヽノ地位ニ安ンゼリ如何ニシテ彼ノ勁健正大ナル風ノ稍備ハレル支那文學ニ抗敵スルヿヲ得ンヤ單リ通常ノ文章然ルニ非ズ所謂和歌ナルモノモ同一ノ弊ニ陷レルモノト云ハザルベカラズ太古素蓋嗚尊カ出雲八重垣ノ歌ヲ風セシヨリ家持ノ萬葉集ヲ撰ムニ至リ又其ヨリ世々ノ敕撰ニ成レル歌集ヲ統觀スルニ間々忠君愛國ノ情ヲ詠シ父子兄弟夫婦ノ際ニ起レル德義上ノ感覺ヲ述フルモノ無キニアラヲド實ニ曉天ノ星ノ如ク寥々幾許モナシ萬葉集ノ如キハ素直ニ見ルヘキモノナキニアラヲド上ニ云ヘルカ如キ非難ハ到底免ルヘカラズ況ンヤ其レヨリ降リテ后ハ唯風流ヲ事

トシ美妙ヲ專ラトシ風容色澤ヲ貴フ其弊ヤ淫艶刻飾佻巧小碎ノ体ヲ成シ織綱見ルニ堪ヘサルナリ抑詩歌ハ心ノ花愛情ノ言語ナリ余曾テ古今ノ和歌ヲ取リテ其意義ヲ檢セシニ春暁秋月露花霜雪ヲ愛シミ世ノ變故ヲ悼ムノ詞若シクハ閨情ヲ述フルノ句多クシテ或ハ其艶麗愛スベク或ハ其情致憐レムベク或ハ其微妙ヲ愛スルノ細カナル殆ト我レヲシテ泣カシムルモノアリト雖社會ノ困厄ヲ憂ヘ人類ノ苦禍ヲ哀シム志士仁人ノ語何所ニカアル人性ノ高尚ナル部分ニ訴ヘ私ヲ排シ公ヲ翼襄シテ人心ヲ救ヒ絶大ノ眞理ヲ美妙高遠ノ詞花ニ飾リテ而スモノ何所ニカアル我レ未タ之レアルヲ見サルナリ是ヲ以テ觀レハ日本ノ詠歌ハ心ニ本キ愛情ヲ種トセシモノニハアレト其心モ愛モ未タ高尚ノ位置ニ至ラサルモノト云ベシ唐ノ樂天微元九ニ與フルノ書ニ云ク自レ登レ朝來

年齒漸長閲レ事多與レ人言多詢ニ事務一毎レ讀ニ書史一多求ニ理道一始知文章合ニ爲レ時而著ニ歌詩合ニ爲事而作一ト杜子美蘇東坡等凡ソ彼國ニ於テ詞宗タルモノヽ所見概チ此ノ如シ然レトモ我歴朝ノ歌人中此ノ如キ精神アルモノヲ見ル能ハズ豈慨嘆ニ堪フベケンヤ此ノ精神ノ乏シキヨリ起レル歌詩ノ弊枚擧ニ遑アラズ其薄弱ニシテ世ニ重セラレズ風人騷客ノ玩具タリシ原因此ニ在リテ存ス妄リニ古雅ヲ貴ヒ民俗ヲ蔑視シ詩歌ヲメ特ニ社會ノ一小局部ニノミ行ハレシメタルモ之レニ職由スト云ハズンバ非ズ此ノ他我國近古ノ詠作論スヘキモノ多シト雖一小冊子ノ序言ニ盡スヘキニアラチハ略ス今ヤ百度更革ノ際文學ノ氣運漸ヤク一變セントスルニ當リ學者往々詠歌ノ事ニ注目シ議論稍喧シカラントス然レトモ或ハ美妙ヲ棄テヽ鄙俗ニ流ル倨然新詩体ト稱スルモノヽ如キ是レナリ或ハ

鄙俗ヲ厭ヒテ古雅ニ過キ博學ノ人ニ非サレハ童謡ヲモ解シ難カラシメントス俗歌改良家ト稱スルモノ是ナリ論者或ハ官ニ依リテ詩歌ヲ改良シ官ニ依リテ詩人ヲ模造セントス其妄想此ニ至リテ極マレリト云フベシ斯ル有樣ニテハ詠詩ノ改良望ムヘキニ非ズ然ラハ之ヲ如何ニセハ可ナラン乎曰ク詩ノ別才ヲ具ヘタルモノ出テヽ廣ク和漢泰西ノ詩ヲ學ヒテ一家新創ノ詩体ヲ成シテ世ヲ風靡スルニ在リ泰西諸國ニ於テ詩作ノ變遷多クハ傑然タル一個人ノ變体ヨリ生ス吾邦詩學上今日ノ急要ハ一家新創ノ詩人ノ現ハレ出ルコナルベシ

友人湯淺吉郎氏頃日長篇ノ歌ヲ詠シ目ケテ十二之石塚ト云フユダヤノ故事ヲ叙述セルモノニシテ日本ニハ未タ其類ヲ見サル史詩ナリ其体制新創ナルノミナラズ道德ノ感覺ヲ含ミ愛國正義ノ

氣ヲ吹鼓シ讀者ヲシテ感動ニ堪ヘサラシメントス余ハ今日ノ如キ茫々タル詠詩ノ沙漠ニ此作アルヲ見テ欣喜措ク能ハサルヲ覺ユ嗚呼此詩固トヨリ非難スヘキ所ナキニ非ズ然レ𪜈吾邦ニ在リテハ空前ノ作ナリ新創ノ事業豈疵瑕ナキヲ得ン余此篇ノ著者ヲ見ルニ所謂詩才ニ富メル人ナランカ望ムラクハ尚發憤厲精シテ思想ヲ煉リ詩情ヲ養ヒテ世ヲ風靡スル一家新創ノ詩人トナラレヨ

老杜曰讀書破萬卷下筆如有神ト蓋シ詩ハ別才アリト雖其培養ヲ要スルヿ此ノ如シ湯淺氏ハ明日發程シテ米國ニ留學セラレントス其ノ彼地ニ在ルヤ望ムラクハ西詩ノ蘊奥ヲ探リ名人文士ニ叩キテ其妙處ニ造詣シ句ヲ煉リ章ヲ鍛ヒテ今十二之石塚ニ開カレタル端緒ヲ繼キテ日本ノ詩歌ヲ一變シ余ヲシテ其大成ヲ祝スルノ喜ヲナサシメヨ嗚呼天父願ハクハ水陸共ニ此人ヲ保護シ留學ノ間其心身ヲ依助シ事業ヲ成シテ故國ニ歸リ主ノ聖榮ヲ輝カシメ給ヘ亞孟

明治十八年九月

植村正久識

十二の石塚
一回緒言
和歌の浦れ磯崎こゆる
さら浪のしらぬむかしを
松陰の眞砂にふして
もとむともかひやおのちん
玉津島姫
久かたの天つみろのに
むを遊ぶ聖靈の鳩れ
錦翼(つばさ)おのらしめたまへ
我神よいさ行て見む
ユダヤの國原

岩むしるヨルダン川の
柳のけ高のやダくき
のせ立てさゝなみ涼し
千尋の青淵
朝日さすエリコの城れ
高樓もうづもるむのり
椰子の葉のあげるも深し
七里の白壁
千早振神の紀念と

ギルガルの岡べふさける
百合花れたてるも高し
十二の石塚

荒野

水枝さす楓のわの葉
影見えて池のはとりの
すゝしさに驢馬引とゞめ
休ふい母ふやいわらぬ
ろの子のも十二のいしを
ゆひさして誰の記念ぞ
こゝ何ぞろの故わらむ
あらまほしあらしめたまへと
問ひし子の顔をてえをつ
たちちねの母のうれしさ
岩ゞ根の草のみどりに

いすわりてうちゐたらふい
久方の天地つくる
神の友信仰の父
エブラハムイサクヤコブの
むりしよりイスラエルびと
すみ馴し牧場もあとに
エジプトの國をしいでゝ
いゐしへのヨセフを知らぬ
夷等の軍車も
境太刀もなまりの如く
紅海の波ゐ沉めし
神の僕モーセの歌を

うたひあげて打や鼓れ
音高し舞や處女の
花うさね袖ふき返し
濱風も涼しくゐりぬ
夕日影殘る椰子の
木ぐくれの岩井くみゐと
つとふめり羔野の原に
朝露のとくゐき出でゝ
鶉かり「マナ」をあつむる
民草もゐひく自由の
風はやみ照らしも果ぬ
稻妻や峯とゝろかし

鳴神のヱホバの山を
あとゝみておとろくまでゐ
いちしろくめもかゝやきて
雲間よりさすや日影の
のとけくも花野ゐあろぶ
蜂のみつ牛のちゝさへ
野ゐ岡にあゞるゝ國い
わゞ國と契約重く
いや高き雲の御柱
行けむゆきかえれば歸り
大御箱神のまゐ〳〵
司びと貝ふきあらし

武士に弓とりもたし
二つちにわかきつちゐり
ねりゆけば妻い子を負ひ
老人い杖つきたてつ
おくきしといろぎに急ぎ
いろくなりさきむや敵の
山といふ山をべこえて
川といふ川をべわたり
四十歳のなゞき旅路も
もてゐゝり果ゐしものを
沙烟また野嵐
立ちへちんゐしき民草

枯きしよりモーセアロンも
空蟬の此世に見えず
ゐりゐけるかゐ
二回古塚
あつかしきカナンの國の
山のすゑ水の行衛を
もるゝとうちゐゐむきべ
エリコより二人のつかひ
歸り來て敵の本城も
ろの路もあらきにけりな
唐錦旌旗ひるがへし
雲ゐして槍と槍とい

朝日さす林のでとく
くろがねの楯と楯とい
岩垣れかたくつらねて
武士のますら武男い
大將ヨシアのあとに
あたゐひて水際ゐ下る
ゐりしもわれ百雷の
落るごとひびきし瀧の
音もたえ千尋の淵の
底みえてひだりみぎりゐ
ゐらなゝの立分きけゝ
一筋の道ぞいで來ぬ

司人荷ふ黄金の
大御箱てらす御前を
通むもおしてけれども
いまいとて十二の族
つきくふすぎはてぬれば
大將ヨシアの御命
いと重き紀念の石を
刻みをおべ此古塚い
何故ぞと後世のうまでや
てと問むヨルダン河の
岩もしる水さへせきし
我神れ今日の恩を

百世ふも千々れ年ふも
かくるぶぐくいやとてしへに
いひつ伝て傳んためふ
族よりとく一人づゝ
いたしねといへべろれとき
我族ベニヤミンより
ふちびしいいとぞ奇しく
思ふちめど身まろりたまひし
父ふりきさをべ十二の
人たちい聖き石をむ
青淵のふろき底より
荷ひあげ一つの塚を

ひんがしの水畔にたてり
またさらに十二の石を
ゑらみとり今も我子よ
古柳なごくわたりを
よくもみよ根白高ゲや
生茂る西の岸より
さゝげ來てこれ石塚とゐん
あしにけるいざやきけかし
昔てろうたてかりけれ
賤の男ゲ渡る野川の
石橋とゐさきをしみきべ
日の神ゝ男神ゐりけん

處女子のつとふ岩井の
數石とふまるゝ見きべ
月の神女神ゐるらじ
野の芝生森の下陰
偶像のたゝさる里ゝ
なかりしといかゐ我子よ
大御神いからせたもふも
宜ゐらずや御命かしてみ
武士ゝ

エリコの都

アイの城白波さわぐ
ガリラヤ海邊の舟も
洞のうちゐ住北山の

敵までもやきうちゐしつ
てゝよりいつ雲井に見ゆる

ヘルモンけ峯の雪かも

我國いうら清らかゐ
治りぬユダヤの國の
あけゞたに獨きらめく
星ゐきや横雲消て
出る日の光の中ゐ
かくきにしヨシアの遺す
鳥の跡ふりぬるてとも
新事もたゞ一卷ゐ
つかねおかゞ十二のさつ矢

折るものいあらじとゞ思ふ
おもひきや住家もとむと
峯を越え谷をへだてゝ
おのかしゝ族〳〵ゐ
ゐちむといい春のゐゞの雨の
とき過て夏來にゝらし
路れべの草花も枯れ
谷陰の青葉もゑぼみ
水無月の照日くるしき

アラビヤの荒野のかぜの
音とのみ聞ゐし物を
人馬れあゆゝのひゞき

いや近くヨルダン川の
あふたより淺瀬渡りて
蓑ひ來るモアブの山の
野牛てふエグロン王を
ふせぐとて我族より
むらさきものてゝろふりおこし
いとさむに丈夫いでぬ
思ひみよ秋の山路の
蘭の霜冬の岡べれ
松の雪みだを世ゐてろ
忠臣の名をもまちるき
ろげるかに汝が父殊に

たけかりけん太刀風あらく
あだ涙のよせくるでとふ
うち碎き追返しけゝ
岩岸の堅くも立ち
あまたゝび戰ひたまへど
久方の雲にろびゆる
高樓のたをるゝ時ゐ
一本れ柱のいかにさゝゆ
べきあたり見廻し
今いとて兩刀の劍
とりいでゝ僕をまねき
いひけらくてい短くも

我家ふみがく傳ふる
形見とせむまたもや敵の
よせ來るべ我もや死ぬん
やよやとくてゝをのがれて
かゝらずも妻子ふてきを
渡せかしまたいましにも幸福
あらんときゝて僕い
言葉なく何んといらへも
ゝら露のたゝ涙のみ
おちてちにうたれし軀
よてたいゝり血潮流れて
槍いられ楯もうもるゝ

沙の上に兩手つきてゞ
頭さへゝはしえあげず
居たりけるかくていはてじと
あゆみよりてとゝせわしく
更ふまたた父いいへらく
我僕時おくれるべ
かひゝるきましてや汝い
奴隷なりるからへゝとて
恥あらじまた神のため
人のためつくさむときの
ゝきてとかnとくたゝずや
いまてゝふ死ぬるべかりを

忠といはじとく〳〵ゆきねと
ことてさいもろのことわりも
いやたかきのさねく〳〵れ
命をばいのゝ得ずして
みつるぎを腰ゝとりはぎ
ゆく僕かへりゝしつゝ
足引の山路ゝいりぬ
今いしもてゝろ安しと
あげときの聲そさまじく
遠近の谷ゝひゞきて
人馬れ足並とゝのへ
列ぎ〳〵に車おし出し

夷等の群來るゝかゝ
きりいりてのげてろ見えね
沙けふりゝふをのぎりと
戰ひけんたちいでたまひし
ゝ姿のすゞくもあるかゝ
ゝぎひだり二人の敵を
わきはさみゝやけわしき
岸べよりとぶよとみきば
音たてゝみぎりの淵ゝ
ゝづみゝりてのゝりさまに
てゝろゝき敵すらおろき
駒とめてゝり物やめつ

ろぐのまゝに軍いとてぬ
名ゐしおふ神の民ゐる
イスラエルのますら武男れ
よしや身い底の水屑と
汚るとも ヨルダン川の
のは波れきよき名ろい
さゞれ石の苔むす岩と
ならんまで千歳の下に
流るめれと人いいふとぞ
されべ子よエグロンろい
かゐしくも父と國との
仇なれまた此塚い

ありし世の神の恩の
記念ゐり忘れなゆめと
いひおいり岩根を立て
夕日さす池のゝきわれ
うろくつをおどろかさじと
静にも今朝咲初し
花蓮一枝手折り
眞白ゐる驢馬引よせて
わらえべに手綱とらせり
岡越れ徑に去る
無花果の青葉ぐくれを
かへりゆくてい ベニヤミンれ

族(やから)ある　ゲラの　獨子(ひとりご)

エホデにて尙(まだ)てゝれつの
てろのとよ母にひかれ
梓弓　春の　遊ふ
いで　しゐりけり

三回山村(やまざと)

奉る　國の　貢(みつぎ)と
千々れ　玉萬れ　小金(こがね)
さゝげゆく御使なれば
あはぎりの旅路ゐらずと
僕をゐ　一間につどひ
三日月れゐくるゝ志ちで

山の端のをくらくゐるい
もしやまた雨もよひかと
窓をあけふりさけみれば
天の原星ころ降しらめ
一むらの浮雲もなき
夏ひでり簑いきずとも
笠ぬきて面(つら)やかすゐよ
玉ほこの道行ゐぞち
立ねむりねむりて杖い
すつるともまたきりとちむ
枝おはき木蔭に來れゑ
涼しくも岩間よりわく

水くまんうつせいるけど
手にむすびのむよしあらむ
今宵よりろの手をぬぐふ
手拭い枕べちかく
よせおけとさけびあいつゝ
大あたふ旅のろあへや
果にけむ庖厨のかたい
ねたつまり鼾の聲ぞ
高かりける時にエホデい
臥房より兩刃の劍
とりいでゝ忍ひ〳〵に
屋のむねのたか階あかべ

上りけり窓のともし火
きら〳〵と影さしわたす
中庭の木の葉の色の
あをやかふ匂も涼し
むは玉のやゝ夜の風に
麻蚊帳のかたよるゝきべ
ていいかに外の花いろの
白かさね玉の帶さへ
まだとかずやいゆきべうり
たろ妙れ夜床の下に
たぶひとりひさおりふせて
いまかるい母ふぞありける

あゝ神よ　イスラエルびと
罪あらむろの罪ゆるし
今も猶　エグロンつよき
手のあらむろの手をくじき
我民を救ひたまへと
祈るらしいのりのすゑに
かゝらずも我身のてをを
くをふらんかたじけなさわ
せきあへず落るなみだい
殘露かも袖ぬらしつゝ
のぼりゆけば夜やふけぬらん
我かどの苔むす路に

立　犬　れ遠聲いとゞ
ものすごく鳶とぶ壁を
とゞれつゝ蝙蝠ちかく
飛うよふ高屋ゲうへを
立わりきエホデひろゐに
思へらくむゐしのてをい
ゐねてより母のつげさせた
もふふて我よく知りぬ
わをきわれふたりの親れ
思ひ子と生きし日より
あらきかぜ露ゐあてじと
いだきもちてごくまきにし

たちちねの袖をしまれむ
行んとてかたいざりせし
ころとゝや身まゐりたまいし
父きみい母ふいへちく
この劍もしもち歸る
僕あらべ彼を奴隷れ
くびきよりゆるしてやりね
いざさらべとてきを名殘に
戰場へむやゐけいりて
エグロンといたくたゝかひ
すゑついに淵の水屑と
ありたまふあもきゐゐしきかも

ろげためふ自由の民と
あされしかゞ山路をめぐり
寶劍をさゝげ歸りし
僕すらまたい汝ふも幸
福あらむと仰せたまひし
御言葉をくりかへしつゝ
いまもかも父ぎむかしを
あつかしみ神のためとて
青淵の底に沉みし
玉あをべおしといいむで
音にあきぬあはきかゐしきかも
ろの頃より石か枯木か

目ゐあまきと頭頂ゐあざる
群鳥をおいもはらわず
手ゐあれど膝間ゐ萌出る
芝草をぬきも得やらぬ
偶像の世といふたゑび
ありしとぞあもれかゐしきりも
今雷もや明日ゐあけゐん
國の敵父の仇も
神のため刺にさゑきず
いくろたひ形見の劍
ぬきもてもゐほぬきみまく
ほし月夜くつぬきすてゑ

神の前ひざまつきてぞ
いのりけるふもとの里れ
庭鳥の八聲もたえて
天の戸のいつ明にけ舞
楓欄のも山ゐげやま
みゐぐれゐ雲居ゐ高き

エルサレムふりぬる城の

石垣にさし昇る日の
影をうけて空ゐ群立つ
山鳩の數ぞしられぬ
みゐろせが貢物の重荷
つきくにゐや荷ひいで

僕ちい大路せましと
並ぬたりされべエホデい
人しれぬミきの腰ある
寶劍を上衣のしたに
かくしもち高屋を降り
僕ちをさきにおくりつ
いまそとて別るゝときふ
やよエホデ腰の寶劍ふ
てゝろせよと母いいひつゝ
氣高くも奥ふゞいりぬ
子を思ふ鶴の一聲
武男のてゝろもいとぎ

ミたれ蘆の葉ぞのくきをれば
あるしくも歸らぬミづの
底深ミろてのおもいを
いのふして母やしりけん
ゑかいわをど神にまかせつ
貢物荷ふ僕等
ゑたゞへていまやエホデハ
椰子の城エリコをさしてゞ
いろぎゆくろもエリコなる
古城いヨシァのときに
ほろぼされ野獅子山猿
住家ゐす椰子れ森とも

われにしを十まり八歳の
ろの昔エグロン王は新
城をふたゝびてゝに
建しとゞヨルダンかはの
川原にて敷石ゑらみ
レバノンの谷よりはこぶ
槇柱ふとしき立る
殿の内にエヂプトの書を
きさむとて指環の小金
襟の玉イスラエルより
うむふとやわさましきかも
大殿の御座あたゝかく

綾錦たるゝ帷ふ
雪の日も冬をおほえず
奥庭の御階すゝしく
白玉のぬける簾ふ
水無月も夏をわすれて
暮すめり霞をわくる
佐保姫もきらきぬ春の
花盛霧にかくるゝ
立田姫まだみぬ秋の
紅葉狩めつらしからぬ
物ぞあかりき

四回 菅城

もるく〳〵とふもとを見まゐ
深みどり木の間〳〵ゐ
白壁のわずかゐ洩れし
大城の正門まぢかく
るるからに貢の重荷
おろさせて塵うち拂ひ
汗ぬぐひ暫時ェホデい
道のへの葡萄の棚下に
涼しくも皆僕等を
いてはせてひとり正門の
鐵門ふゆき案内とていつ
門守の後よりいれゐ

門毎ゐ槍をよてたへ
楯をもち兵士ゐまた
たちゐらぶいゐゝく軍馬の
立つゝまゐ戰車ゑ備へ
たる廣庭過て
大殿の御階の下に
いたりしゐェグロン王い
御座に在りちかく侍ふ
勇士い狼のごと
みゐへりて蝮のごとく
疾視たる面樣こうはゐ
ろろしけゐ白き山羊の

皮きたる狼あらずい
くさあゐのいむら花さく
園にいる蝮とやいもむ
からにしき身ふしまとへば
中〳〵わ夷の風体ぞ
見えまさるいかにもあして
御座近くのぼらん物と
捧げてし國の貢物の
奇玉や黄金あらねど
千々に思ひ萬にてゝろ
くたけともせんすべをなき
ふるはあきエグロン王わ

いと厚く款待されしを
僥倖としてエリコの都
いでにけり時にエホデの
いゝけらく我猶思ふて
とあれば暫時てゝに
とぶまらん速くあゞとも
のえりねといとねむごろに
仰せらきるか〳〵おもひ
わきがたくおん顔色も
たぶあらず見ゆる物から
何處までもまけて御供
いたさんといらへ申せば

とく行けといきまきたまへば
僕等も皆家路わぶ
のぼりゆる空とふ鳥も
ねくらとる一本高く
椰子の樹のたてる山路を
越くれゐ岩根わらはき
水無月の枯野の原に
咲百合の賤ぶ朝飼の
烟とも明日い消ぬん
花ゐげらてれわくらべい
宮人の袖のにしきも
光ゐく一枝手折り

敷島の大和の兄弟に
おくりゐべいかわわれと
詠むらん物思ふ身は
はゆゐきいゆくともゐしに
花鳥の情もしらず
何時の間わ人里遠く
なりしわや近く聞ゆる
潮水の音におどろき
ゐゐのむきべはやキルガルの
岡わきぬ看れい十二の
石の塚聽けいヨルダンの
波の音いつれわしても

父君の昔をしのび
我神の舊恩を思ふ
便りなる木陰ふたふを
あゝ神よ父の仇とのみ
おもはずたゞ國の敵と
おもいせよ名譽の念を
うち消してまことの勇氣
たまいきと祈禱ゐをきを
かしてくも神の聖靈や
光臨けん再びエリコに
むせのぼり御階の下にて
我王につげ申すべき

秘事あり人を去ゞけて
きゝたゞへいと幸福あらむ
あいれとくてのよし聞へ
あけられよと高らかにいへゞ
去むし待ねと近習
奥にゆきやゝ時過ぎて
出來りいざてなたへと
いざゐふて御階を昇り
庭ゐいでるかき廊下
すきてゝ涼殿まで
案内ゐしもと來し方へゞ
かえりける芭蕉の廣葉

ひるかへし吹入る風は
涼しさを　エグロン王は
北窓の隙戸おし開き
藤牀を　猶うち臥して
いませしか　エホバの神の
御命なりといふ一聲に
おとろきて身をのへす間に
上衣もておほひしみぎの
腰よりぞあいや右手を
寶劍をぬくよとミしが
はや王の胸板ふかく
刺し通し　鋩　脊を

あまりける管のまくらも
眞白なるをやのむしろも
くれなゐの血しほに染て
凄しくげに肥へふとる
白牛を屠るぞの如し
思ひきやペニヤミンなる
族にい多しと聞けど
エホデやで左手利捷にて
我神の奇しき器と
あらむといエホデひろかに
立いで〻涼殿の戸
のたくぢ廊下つたひ

庭をすぎ御階くだるべ
夏の日はれ午の暑熱の
たへあたく唾りやすらむ
御垣守楯をまくらに
槍をすてとてろくに
いたりしもとゞめらるゝ
てゞもなく城れ門外まで
いでにけりたゞちに椰子の
林よりはやしにいりて
西山のすろ野の原に
ゐけゆけむ何事ぞやと
羊牧者顔を合せて

行先に立ちふさがりぬ
我エホデ今日エグロンを
刺ころせりいまよりゆきて
エフライムのますら武男等
かりあつめ今宵エリコに
くたるべしとく汝等も
野に山に腰の角笛
ふき鳴らし我族より
殊更に多くあつめて
ヨルダンれ津にくだり
川一の浅瀬をゐちを
石をけみ沙をはゐひて

行水をせきとめおきけ
敵人のわたるに便利
よくゐさたゐゝ奇しき
功あらむとまたかけ出し
山路より山路にかゝり
はせ去りぬ之きをむきゝて
羊牧者かたみにいざと
いゝかいし分きちりしゐ
近遠の峯もとよみて
吹たつる角笛れ音に
山彦も聲うちろへて
すさましきかも

五回溪流

御垣守二人いで來て
みぎひだり立分れつゝ
廊下の敷石の上を
立ありきいま涼殿を
み廻りし人聲もゐく
戸い閉たりはや青年い
歸へりしやと問へい一人ゐ
いらへしていつかへりけん
ゑらねども壬にい猶ほも
神言を獨ちもふて
いますらんさゐくい例の

午睡して國に殘しゝ
姫君の夢やミるらん
やよやミよ西の高峯ゐ
日いりぬとふかくけふい
おろうらずやみゆるしゐくも
涼殿いざ明てみんと
立よりて楯と槍とい
かたさらの一人にわたし
槇の戸をおしわけ見れば
蟬の羽のうそき御衣も
玄ろかねのおん冠も血
にろミて軀ゝしたに

たよをありあいろもいかにと
かけ上り嚴しくならす
高樓の鐘れひゞきに
何事ぞとあわて噪ぎて
おく庭の涼殿へと
つとひ來るおりから聞ゆる
鯨波の聲いまさしく
イスラエルの國人ゐるらめ
門守をとく〳〵めして
問もやと喚る聲も
果ぬ間に夜風もげしく
火おてりて殿より殿ゐ

もえうつり城い焔とぞ
にけり烟をくゝり
火をふミてエホデいさきに
進ミいりゐちミうちして
敵びとのにぐるを追す
戰ふたりゐれひゞきにい
山もさけゐの光にい
空もてげエリコの城い
うつせミの此世ながらの
地獄かも見るゑに灰とぞ
あれりけるさてのゞをゆく
夷等のかへりミすれを

山の端にいる弓張の
月あらぬてゝろぼろくも
むゞ玉の夜路ゐくらく
やうゝゝゐ津をたづね
川岸にありたちミれゞ
水淺し今霄の僥倖い
てれのミとゐゐを渡りし
おりしもあれ石のくずるゝ
音高くよせくる激浪ゐ
あゞさきて岩にくたかき
叫びおふソトムゴモラも
かくありけんてれよりさきゐ

川邊まて敵退下し
ひろかふもエホデいいろき
水上ふ積みふし
石をくづさせてまた岩岸ふ
のぼりたち角笛たかく
吹あらせばいくらともあく
たきいたす蘆火の影の
きらくと波ふうかびて
敵人の行衛さやけし
名ふしおふふ死洵のうみに
潮かぜれからもとゝめず
おづむらし西の岸ふい

イフライムれ勇士多く
椰子の葉をあたに荷ふて
ひんぐしの岸にいあまた
ベニヤミンの武士たちて
橄欖れ枝を手ふもち
年少きエホデをあげて
國民の士師と
あふきつゝモウセの歌を
三たびまでうたひあげたる
よろおひれ聲猶湧ふ
殘りけり皆もろともに
エホデをバゲラの家まで

送らむと山邊を遠く
見渡せば夜もすがら明て
朝日影さしむかひたる
ギルガルの紀念の石れ
あたりより空ゐ群立つ
山鳩のろの數十二
あるぞあやしき
あわき我ろの鳩れごと
翼あらいユダヤの國れ
いふしへれ神の恩惠を
つげむためいざかえらゐん
うらやすの國ゐ

明治十八年の六月　湯淺吉郎

誤　正

序文

三丁十二行　來ハ　來カタ
四丁一行　年ハ　年カタ
七丁二行　依ハ　佑

本文

四丁十行　境ハ　燒
五丁七行　羔ハ　荒
七丁十二行　へハ　く
十六丁九行　蘭ハ　菊
廿五丁四行　しハ　餘字
廿七丁十一行　膝ハ　餘字
四十二丁八行　飼ハ　餉

明治十八年九月廿二日御届
明治十八年十月十日　出版

定價六錢

著作兼出版人　群馬縣平民　湯淺吉郎
群馬縣上野國碓氷郡安中驛五百卅番地住